

# 河童

大村伸一

自分が河童だったとは七十年以上生きて来て一度も気づかなかった。

私の両親は私が何者であるかについて何も話しはしなかったし、先立った妻も一度もそんなことを言いはしなかった。賢明な妻だったから何も気づかなかったはずはなく、気づきながらも私の気持ちを思って何も言わずにいたのだろうか。今では真相を知ることはできない。

妻との間に子供は一人もできなかった。それを不本意だと思ったことはないが妻はずっと気にしていたようだった。私はペットを見ると無性に不愉快になるので、我が家ではペットを飼うこともなかった。私は少しも気づかなかったが、ずっと慈しむ対象のなかった妻は家に一人である間さぞさびしかったのだろう。以前は、近所の子供にちよくちよくお菓子などを与えていたようだ。だが、それも子供達の親から苦情があつて、やめなくてはならなかった。

河童であるというのに意外かも知れないが、私には性欲は人一倍あつて妻の他にも幾人か愛人がいた。多いときは七人ほどいただろうか。そして、五十年の夫婦生活の間、愛人がいないことは一度もなかった。私の容貌はとりたてて魅力的というわけではないのだが、情の深い女達と知り合う機会が多く何故かその関係は長く続いた。性欲が強だけでなく相手に十分満足を与えることにも熱心だったため、愛人がいたからといって妻を愛することがおろそかになったことはない。毎日、妻を含め何人かの愛人を抱いてそれぞれを幾度も至らしめるという生活を五十年間続けた。そして、妻を失った今も毎日、愛人たちを愛し続けている。

今、「愛し続けている」と書いたが誤解されるといけないので説明を加えておこう。私は子供の頃から冷淡な性格で、両親や妻のことを愛していると自覚したことは一度もなかった。だから「愛し続けている」といってもつまりそれは体の交わりを持ち続けているというだけのことしか意味していない。結婚する以前も性欲を解消するために付き合っていた女はいたが、彼女達に愛を感じたことはなかった。そもそも愛するという感情がどのようなことなのかよく分からなかったし、それは七十を過ぎた今も同じだ。こんな冷淡で愛することを知らない男に、何故こうも多くの女が関係を持ちたがるのか分からない。もしかすると、それが河童であるということなのだろうか。

生まれつき指が短かかったので、手先を使う職への道は閉ざされていたし、そのような仕事には興味がなかった。二十歳前後から一目見るだけで人の寿命が分かるようになったが、それを仕事にしようとは思わなかった。寿命を言い当てたせいで一度ひどい目に会ったのだ。それからは、二度とそんなことができるなどと人に言うこともなかった。仕事に就かなくてはならなくなった頃には何人もの女達と付き合うようになっていたので、毎日大勢の女を愛し続けるために、比較的時間の自由になる仕事を選んだ。ここで仕事の内容を詳しくは明かせないが、生活必需品の訪問販売のような仕事だと言えばそれほど間違っていない。訪問販売が性にあっていただけなのか、仕事をしていて50年あまりの間、商品が売れずに困ったという経験は一度もなかった。飛び込みで入った店で、何も買ってもらえずに追い出されたことさえもない。どちらかという口下手なのだが、そのせいでかえって話を聞いている方がもどかしくなって、それで結局買ってしまうのだと、ある得意客が言っていたがそれは本当なのかもしれない。

一度だけこの国を離れて十日間ほどの出張に出たことがある。一番の心配はありあまる性欲をどうやって解消するかだったが、いざ出張先の町に着いてみるとそれにはさほど困らなかった。結局、その出張で一番困ったのは、仕事の最後の目的地に向かう道で、渡らなくてはならない橋が前日の嵐で落ちてしまっていたことだった。迂回すると三日はかかると言われ、しかも嵐で船はみな流されているので泳いで渡るしかないのだという。私は子供の頃から水泳が苦手で25メートル以上泳いだことがない。一度小さな池で泳ごうとしたら、池の真ん中で息継ぎができなくなり溺れた。もしかしたらあのとき自分は死んでしまっているのではないかと思うこともあるのだが、死んだまま生き続けているなどどう考えれば良いのか分からない。ただ、溺れた私を誰がどんなふうに助けてくれたのかは憶えていないので、考えようがないけれどもやはり死んでいるのではないかという疑いはずっと拭い去れずにいる。

嵐はもうとうに過ぎており、川の水位も腰までしかなかったが、川幅は広く渡りきるのに一時間はかかった。途中に奇妙な木が生い茂っていて、水中の根元から小さな魚の群れが現れ私の足にぶつかってきて、あやうく倒れそうになった。水上の枝の間からは無数の小さな昆虫が羽音を立てて飛び出してきて私の目を狙いぶつかってくる。会社の雇った案内の男はあらかじめ何も注意してくれなかったから、あるいはあの男は私の荷物を狙っていた追いはぎのようなものだったのかもしれない。川を渡りきると残念そうな表情を隠さず、あとは一本道だとだけ言い残してどこかに立ち去ってしまったのだ。

濡れた服を乾かし再び歩き始めた私は道端に胡瓜畑があることに気づいた。畑で働く老人

に對価を払い胡瓜を三本手に入れたが、あれほど空腹でなければ私は胡瓜を食べたりしなかっただろう。空腹に耐えられず食べようとはしたのだが、一口嚙っただけで口の中に広がる葉のような味に幾度も私は嘔吐し、それ以上口をつけることなどできなかつた。捨てるわけにもいかないので残り二本の胡瓜を鞆の底にしまつて、私は歩き続けた。

その二本の胡瓜は帰宅してからのおみやげになつた。一本は家内に、もう一本は愛人に。そのおみやげが彼女たちに喜ばれたのかどうかはもう憶えていない。

妻の三回忌の法事のまんじゅうを食べていて、私は自分が河童だつたことに気づいた。七十年以上生きて来たというのに今まで一度も気づかなかつたとは迂闊だつた。私は生まれつき河童だつたのだろうか。両親がそのことを何も話してくれなかつたのは、両親と一緒に住んでいた頃の私がまだ河童ではなかつたからではないのだろうか。だとすればおそらく、池で溺れたあのときに一度死んでそのまま河童に変わったのだろうか。もしかすると、あの川を渡つたときに足を啄んだ魚のせい、目に潜り込んだ虫のせい、あるいは追いはぎに違いないあの男のせいで、私は河童に変わってしまったのかもしれない。今となつては真相は知りたがたい。

まんじゅうを全部食べ終つたとき、私は家の隅々まで響く大きな声で叫んだ。そして、その声はまぎれもない河童の鳴き声であつた。